

『ワックス、灰、紙、キャンバスのサンドイッチ = ファンタジー』

絵の制作にあたり、まず、顔料あるいは灰をあらかじめ混ぜたワックスを熱してキャンバスに塗りこんでいく。その上に全紙大の和紙をおく。そして、この両方の素材はアイロンをかけられることによって、熱により結合させられる。

我々は日常使っているような素材についてあまり熟考したりはしない。使用説明書を読んでその通りに実行する。しかし、那須秀至はそうではない。彼にとって素材の前史は“単純な介入”によって複雑なものをより複雑にするようインスピレーションがはたらく前提となるものである。それは、素材を組み合わせたり、コラージュしたり、成功するのならそれを圧搾したりすることによってなされる。ほとんどの素材は、それらが互いに偶然遭遇した場合に、それぞれに独自の製作過程の歴史とういうものを背景に持っているものである。例えば、キャンバスは周知のごとく糸が組み合わされて出来ている。経糸と緯糸からなる小さな交差点がこの素材を構成するのである。この無数の上下の交差の内部に空気を閉じ込める小さな空間ができる。この多くの小空間の集積こそ、那須が絵具の層に覆われている“空の層”と呼んでいるものであろう。この絵具の層の下にある気泡に満ちた糸の空間からなる“空の層”によってファンタジーの潜在力と素材による強制がこの画家にもたらされる。この二つのことは次のような製作過程において調和する。ワックスとピグメントは重なり合って量的な関係 X を取り結び、それによって作用の形 Y を創造する。那須は様々な作り方や特徴を持つ和紙を詳細に研究し、現在では厚さ、構造、色の違いにより、3種類の和紙を使い分けている。

アイロンの押し具合と温度は、製作過程で外に向かって目に見える形、身振り、効果そのままの現われである。ここにおいてこの芸術家は概念的な製作の仕方を乗り越え、情緒的なものの領域にはいり、文字通り“描く”のである。

那須の製作の速度はゆっくりであり、職人仕事が本来手堅く、地味なものであるという意味できわめて職人仕事の印象を受け、ほとんど伝統的、日本的である。しかしながら、このような製作過程から“思いも寄らないもの”が輝き出てくるのである。仄かな輝き、興奮、静かな憤激が様々な画層の間の諸表象から流れ出てくる…。

ワックス、灰、紙、キャンバスのサンドイッチ=ファンタジー。

2001年12月

トーマス・バイルレ (美術家・シュテーデル美術大学教授)



訳：澤田 一真